
黎明の恒星殻

早河素子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黎明の恒星殻

【Nコード】

N9248Q

【作者名】

早河素子

【あらすじ】

太陽を覆うように築かれたダイソン殻上の都市サンスポットで起こる不可思議な事件に立ち向かう捜査官たち。
SFフリークの作者がおくるメタ風味SF。

HPからの転載です。

？

待っていたサラダとサンドイッチがやっと来た。やっと、と言ってもここ、カフェ《アストレイア》のコックは腕が良いだけじゃなくて、調理も早い。

私がやっと、と感じたのはただ単にこの男 그레이がいい歳こいて子供みたいに貧乏ゆすりを止めないからだ。

本人に聞けば、美味しい料理を待つ間はこうして落ち着きなくしているのが礼儀というものらしい。そんな礼儀は始めて聞いた。

わたしがウェイトレスのキティに「ありがとう」と言っているうちに、早くもこの男はサラダと一緒にテーブルに置かれたドレッシングのボトルを手にしている。

慌てたせいか、必要以上に力を加えられたボトルからドロツとしたサウザウンド・アイランド（サウザンと呼ばれるのは誤りらしい）が床に飛び散る。

그레이は慌てた様子もなく平然と無視して、残りをサラダに掛けてうつとりしているが、同じオープンテラスで食事をしている他の客は顔をしかめている。

わたしはため息を吐きつつ、まだ傍にいたキティに今度は謝った。彼女は「良いですよ。どうせ外ですから。後で掃除します」と苦笑しながら言う。

アストレイア
時間があれば日がな一日に入り浸っていることさえある 그레이の扱いには慣れているのだ。

그레이はいえ、自分の仕出かした不始末はどこ吹く風と幸せそうにサラダにフォークを突き立てている。

新鮮な野菜に付き物のシャキシャキという音は、食欲など本来無いはずのわたしも確かに食べたくなってくるくらいである。

それでも 그레이ときたら。皿に残るサラダをかき込んで、口いっぱい頬張ると、あろう事かドレッシングを直接口に注ぎ始めた。

信じられない不行状。これだから育ちの悪い男は嫌い。周りの客の視線がますます痛くなる。グレイと同じく常連の数人は、見慣れたのか呆れたのか、自分の食事と談話に集中している。

わたしが文句を言う前に、なんとわたしにドレッシングが掛かった。さすがにグレイも慌てて拭き取る。まったくわたしを何だと思ってるのかしら。

その後はさすがにグレイも少し大人しくなつて少しずつサンドイッチを口にする、なんてことは無くてさっきと同じように口いっぱいに頬張つてモグモグやっている。

ムグウ、と変な声を出して自分の胸の辺りをバンバン叩く。喉にサンドイッチを詰まらせた様子。わたしはキティに「お冷をお願い」と言う。

心得たものでキティはすぐにコップ一杯の水をお盆に載せて運んでくる。

グレイはひつたくるようにコップをお盆から、かつさらうと急いで喉に流し込む。つかえは取れたようで、頭をかきながら「ありがとう」などと言っている。

わたしにはお礼は無いのかしら、と思つていとわたしを指先でコツコツとやって「ありがと、助かった」ときた。こういうところはかわいいと思うのだが、いかんせん直ぐに残りのサンドイッチをすごい勢いで食べ始めたのはいただけない。

今度は喉に詰まらせずにサンドイッチを完食する。

グレイが皿に残ったパン屑を指先でつまんで一生懸命食べていると、テラスに《アストレイア》の店主ジョニーが出てくる。

キティはいつの間にか店の中に引っ込んでいた。

ジョニーは、パン屑に執着するグレイを呆れた様子で見下ろすと（ジョニーはかなりの大男だ）後ろからグレイの頭をポカリとやった。

「あいたっ」顔をしかめてグレイ。「何だよ、この店。客に暴力振るうなんて信じられない」

「うるさい。俺の店ではマナーを守れ。それでも公務員か」

ジョニーがもう一度グレイの頭をポカリ。

グレイは心外そうな顔。

「公務員はリストラがないんだ。偉いんだぞ」誇らしげにグレイが言う。

「この税金泥棒が。ペネロペも何だってこんな奴の相棒やってるんだか」

ジョニーの意見に賛成しかける。わたしもなんだってこんなしけた男とつるんでるんだろ。

「それは俺にゾッコンだからさ」相変わらずグレイは偉そうだ。本当こんな男のどこがいいんだろ。自分でも疑問。

「ごめんなさい、ジョニー。グレイったら、昨日の昼から何も食べてなかったから。それにあなたの料理が美味すぎるのも悪いのよ」仕方なくわたしがフロアに入る。謝りつつ、ジョニーをおだてるのも忘れない。

「そ、そうか。じゃあ、多少は仕方ないか。俺のサンドイッチ美味かったろ、春の新作だぜ」

ジョニーは直ぐに機嫌を直してくれた。それにもともと大して怒っていなかったのだろう。ジョニーはわたしよりグレイとの付き合いも長い訳だし。

「ほらな。俺が困ってるって助けてくれる。惚れてるんだ。これが証拠だよ」

グレイは余計なことしか言わない。本当はグレイのほうがわたしにゾッコンなのに。

「グレイ、勘違いしないでね。あなたってば、しつけのなっていない子供みたいだから、仕方なく面倒見てあげてるの。放っておけないだけ」

まったく、どうして男って自分に都合の良いようにしか解釈できないのかしら。本当困っちゃう。

「そうだ、そうだ。調子に乗るなよ、グレイ」ジョニーも乗ってく

る。

「ちえ、二人して俺を苛めて。何が楽しいんだか」

グレイは拗ねてしまった。調子に乗って、注意されたあとはいつもこう。

「はい、はい。ジョニー、お会計お願い。行くわよ、グレイ。クルップ局長に、二時に来いって言われてるでしょ」

クルト・クルップは温厚だが、時間には厳しい。この前も出勤時間に大幅に遅刻して減俸をくらったばかりなのに。グレイの辞書には学習という言葉は無いみたい。

「六百五十五サンスだよ。早く行きな。減俸になったってウチはツケはお断りだからな」

グレイはシャツの胸ポケットに刺さっていた札入れを取り出して、中から千サンス紙幣を抜き出してジョニーに渡す。

「ジョニー、お釣りは取っというて。迷惑代よ」わたしはすかさず言った。

「おい、嘘だろ、ハニー。俺の財布にや、残り五千サンスしかないんだぜ。あと半月どうしろってんだ。なあ、ジョニー返してくれるよな。友達だろ」

グレイは哀れっぱい声で懇願するが、ジョニーは取り合わない。わたしのことをハニーなんて呼ぶのも気に食わない。

それはまあ、わたしだってたまにそう呼ばれて悪い気はしないけど。グレイがわたしをハニーと呼ぶのは金欠のときだけだし。

「だいたい、あなたの給料の半分はわたしの物でしょ。クルトだって言っただじゃない。半分はわたしの分として二倍払ってるんだって。確かに普段はお金なんて必要ないけど、権利まで放棄した訳じゃないんだから」

グレイはあからさまに肩を落としている。自業自得ってものよ。

「どうせお前、ペネロペにやかなわないんだから、諦めて出勤するんだな。帰りに寄れば、余りの食材でも分けてやるからよ」

ジョニーはそう言っただけでわたし達を送りだした。なんだかんだ言っ

てグレイのことを心配しているのだ。美しい友情ってやつかしら。そんなにお上品な物じゃないだろうけど。

二人とも元は孤児だったのだ。太陽の周りに築かれたダイソンスフィア。太陽自治区の首都サンスポット市。その地下、太陽を上と考えるなら天上。ホメオスタシスフィールドも充分には効かない、そんな場所。地獄の熱気が籠る場所。

貧民街、太陽スラム、呼び方は何だっていい。そこで親もいない子供が生き抜くのは至難。孤児達は協力しあって暮らしていたらしい。そんなグループの、同じグループの一員だった二人。

並みの結束じゃないと思う。お互いをかばいあわなければ生きていけない。

一人は成長して真つ当な職に就き、もう一人は金のために堕ちるところまで堕ちた。それでも失われない友情。人間て不思議。

グレイが汚れ仕事から足を洗って公務員になって、それから今日みたいな日常を送るようになった。

そのグレイはぶつぶつと文句を言い続けてる。ジョニーに比べてなんて心が狭いのかしら。ちよつとは見習ったらどうなのよ。思っても口にはしないが。

「どうしたんだよ、ペネロペ。顔色悪いぜ、さつきから。生理かい」

「ちよつとはジョニーを見習って紳士になったらどうなの？ 見えもしないわたしの顔色よりマナーを気にしなさいよ、マナーを」

なにが生理かい？ よ。もしかしてわたし以外の女性にもこんなこと言ってるのかしら。

グレイはやつと黙って駐車場を自分のエアカー目指して歩く。

赤いスポーツタイプのエアカー。三百キロ以上出るやつ。わたしは車には詳しくないけど、カーショップで一目みて気に入った。グレイは金がないって渋ったけど、わたしが無理を言って購入した。流麗なフォルム、なだらかな曲線はなんとなく女性を感じられる。何度見ても美しいと思う。

なんだか、わたしみたい。とグレイに言ってみたことがある。グ

レイは君のほうが綺麗だよ、なんて言ってくれたけど。適当に答えただけなのは分かってる。嬉しかったけど。

近くから 그레이がキーを操作する。左のドアがゆっくりと上がる。まるで片翼をもがれた天使みたい。

그레이とわたしが乗り込む。座席のセンサーが感知してドアが閉まった。

「なあ、まだ怒ってる？ 空腹だったんだ、許してくれよ。悪かったから」

그레이は反省してるみたいだ。三十分もすれば、このしおらしい態度も消えて元に戻るのだろうけど。

「……来月……」

「えっと、何？ なんでも言って、君のためなら何でもするから」
そこまで言うのなら。わたしは言うことにした。

「来月、クレメンスホールで上演される演劇観に行きたい」

「そうだ、《アストレイア》で夕食にしよう。豪華な奴、ケーキだつてオッケーさ。ね、だから機嫌直してよ」

まったくこの男ときたら「君のためなら何でもする」って何だったのかしら。

「違う。クレメンスホールで《ロミオとジュリエット》観るの。それ以外は、嫌」

그레이は困っている。だってクレメンスホールのチケット代だけで給料半月分が吹っ飛ぶ。もちろん、半分はわたしの給料だけど。

그레이はいつも自分のお金にしちゃってる。

「映画、映画にしようよ。君の好きなディスク借りてきてさ。家で二人っきりで観ようよ。絶対そのほうがいいから。ね、ね」

그레이は瞳をうるうるさせてる。そういえば地球産の哺乳類でこんな目をした愛玩動物がいた気がする。でも、今日のわたしは騙されない。

「い、や、よ。いつも我慢してるんだから、それに今日の仕事でボinas貰えるかもしれないじゃない。いえ、貰いなさい。貰ってわ

たしをデートに連れてって。料金だつてどうせ一人分なんだから」

グレイは瞳うるうるをしばらく続けていたが、今日のわたしには効き目のないことを悟ると諦めて、降参、というように両手をひらひらさせた。

「分かったよ。君には敵わない。ジョニーの言うとおりさ。何処へなりともご招待いたしますよ」

降参したあとの思い切りはいい。グレイのこういうところは好きだ。

グレイがアクセルを踏み込み、エアカーがゆっくりと浮上する。

ここサンスポット市の整理され、管理された街並みもそう悪いものでもない。少なくとも、汚くはない。

ここはサンスポットでも郊外にあたるから、周囲にはあまり高い建造物はない。

情報管理局本部があるのは、第三区、市の中心部。ダイソンスフイア、太陽自治区の情報が集中する地域。だからこそ情報管理局がある。

グレイの運転で空中標識を時折無視してショートカットしながら、管理局へ向かう。警告灯は点けていない。捜査でもないのにそんなことして、ばれたらクルップ局長は許さない。まして遅刻しない為なんて言ったら、向こう三ヶ月は減俸に違いない。

お金がなくてもわたしは一向に困らないけど、グレイには大問題。お腹を空かせて惨めったらしく、わたしやジョニーに泣きつくグレイの姿。想像すると笑っちゃう。

「なに笑ってんの？ 機嫌、良くなったみたいだね」グレイが言う。わたしの機嫌が完全に直ったので安堵したみたいだ。

「別に。それより、あと十五分で二時よ。大丈夫なの？ 減俸されて食費もなくなってひもじくしてる貴方見るのなんて嫌よ。急ぎなさい」

言ってやる。デートに行くお金も無くなったら、愛想つかしてやるんだから。

「おいおい、あと二回スピード違反で捕まったら免停なんだぜ。徒歩で出勤なんてごめんだよ」

知らない。どうせ歩くのはグレイだけなんだし。ちょっとはなまった身体も引き締まるかもしれない。だいたい仕事じゃないときのグレイはだらだら過ごしすぎなのだ。

時間まであと八分。

管理局が見えてきた。これなら間に合いそう。

空中標識は赤を示しているけど、グレイはそんなの無視して突っ込んだ。当然のように横から、別のエアカーが迫ってくる。

グリーンの小型車だ。低燃費、低排出ガスとやらで最近流行っているやつ。

向こうは慌ててブレーキをかけている。でもエアカーはすぐには止まらない。グレイが思いっきり、出力レバーを上げる。最大噴射で車体がさらに五メートルほど浮き上がる。

スリップする小型車を尻目に、そのまま管理局の屋上駐車場に着地する。運転手が何か叫んでいるけど、グレイは気にしない。わたしも見なかったことにする。

わたし達は車を降りる。

忘れていた、このエアカーの名前を思い出す。《アルテミス》たしかそうだった。ドアを開いたその姿はやっぱり天使に見える。名前は女神だけれど。

「あと五分よ」わたしは一応、警告する。でも、おそらく間に合うだろう。

「分かってる。もう着いたんだから大丈夫だって」グレイが言う。降りボタンを押してエレベータを待つ。ほとんど待たなかった。上がってきたのは空のエレベータ、二人で乗り込む。グレイが十階を押す。屋上は十三階にあたる。たった三階だけ。すぐに着いた。

まだ三分ある。わたし達は悠々と局長室に着く。でも、クルトの口癖、なんだったかしら。学校の先生みたいな、あの科白。

「グレイ、ペネロペ入ります」グレイが名乗ってドアを開ける。

「グレイ、やっと来たか。ペネロペも。いつも言っているだろう？
五分钟前だ、約束の五分钟前には来ていると」

そうそう、この科白。時間を守るのが大好きなクルト・クルップ
と時間の存在自体を時々忘れたみたいになるグレイ。足して二で割
ったら丁度よくならないかしら。

「どうせグレイ、お前がペネロペの足を引つ張ったんだろうが」

クルップ局長はグレイに原因ありと決め付けている。正しい判断
だって、わたしは悪くないもの。

「局長、彼女に足なんてないことくらい分かってるでしょう。まっ
たく、頭の固い中年はこれだから。それに遅刻してないんだから、
怒られる謂れはないですよ」

そんなこと大真面目で言うグレイ。クルップ局長が怒るのも無理
はないわよ。

「すみません。彼の代わりにわたしが謝ります、パートナーですか
ら。それより、仕事の話を。休日に呼び出すということは急ぎです
よね」

一瞬、真っ赤になって怒鳴りかけたクルップ局長の顔が元に戻る。
仕事の顔。プロだ。

これに比べてグレイときたら、わたしの意見を聞いて怒りを静め
た局長を不思議そうに見るばかり。

「仕事、うむ仕事だ。公務員は国民の血税で雇われてるんだからな、
その分の仕事はしなきゃならん」

「俺だって税金は払ってるのに」

「それ以上に給料貰ってるだろうが。仕事しろ、仕事。ほら、これ
が資料。早く目を通してくれ」

クルップ局長は、コピー用紙の束をグレイに渡す。グレイは受け
取るけど、あまり嬉しそうじゃない。でも、仕事ってそんなもの。
わたしは仕事するの好きだけど。

「身辺調査？　なんでまたこんなこと。警察に任せたほうがいいん
じゃないですか。だって張り込みとか面倒だし、疲れるし、たまに

徹夜だし」

グレイはもうあからさまに嫌そうな顔して紙束を机に投げ出す。何でか分からないけど、いつもの尊大な態度。一応相手は上役なのに。わたしのパートナーの変なところ、何時でも、誰に対してもとにかく偉そう。

「何でわたし達がこの仕事を？ やっぱ、この男が何か情報生物と関係があるんですか？」

「そう、だから君達の仕事。正確にはこの男じゃなくて、この男の恋人だった物に情報生命体が寄生してる、らしい。詳しくは分かんが、疑いがあるから調べる。簡単なことだ。もし実際に寄生されていれば、話し合うか、駄目なら”情報凍結”^{インフォフリーズ}して捕まえる」

そう言っオフリザーてクルップ局長は一丁の銃を差し出した。新しい”情報凍結銃”。グレイが前に使ってたのと見た目はそっくり同じ。たぶん同一品。

情報が寄生した物体を、それごとフリーズさせて捕獲するための銃。わたしとグレイはこの銃で、わたし達が情報寄生体と呼ぶものを何度も捕まえてきた。

「二度と壊すなよ、グレイ。こいつ一丁でお前の給料五年分だぞ、五・年・分！ まったく分かってるんだか」

そう、前の仕事のとき、情報凍結銃が壊れた。グレイの不注意で、とはいってもあれは避け難い事態だったことは確かだけど。でもだから、嚴重注意だけで済んで、備品である情報凍結銃を弁償させられたりはしなかった。

情報管理局、ダイソンスフィア太陽自治区に突如現れ始めた情報生命体を調査するために創設された機関。

発生、生態、存在理由、全てが謎の宇宙生物、情報管理局によって情報寄生体と名付けられたそれは、生物に無機物、有機物を問わず寄生して生きている。あらゆる物質を媒体として既に存在するそれに自己の情報を書き加える、あるいは上書きする。

例えば、小型犬を媒体に選んだ情報寄生体はその犬の遺伝子情報

と宇宙に記録されたその固体情報に干渉して、子犬を突然巨大な水星蜘蛛に変化させた、なんてこともある。

でも、それはやり過ぎで、子犬も、正確には子犬だった水星蜘蛛も、情報に干渉して存在を革変した情報寄生体も、復元力にやられて跡形も無く消滅した。

あと少しばかりゆつくりやれば、宇宙は広いし、復元力も見逃してくれたかもしれないけど、実際は復元力は働いたし、その結果あの破壊的現象が起こった。

復元力、宇宙を宇宙足らしめている力、情報の改竄を行い過ぎれば宇宙は元の状態に戻ろうとして復元力が働く。簡単な理屈。宇宙だって、他人に弄くり回されるのは嫌に違いない。だって、もしわたしだったら絶対嫌だし。

「しつこい男は嫌われますよ、局長。俺みたいに過去は気にしない男のほうがモテるんです。間違いありません。銃は壊れるときは壊れるし、壊れないときは壊れない。だから大丈夫です。壊れてもそのときは俺の責任じゃない。別の誰かのせいに違いない」

別の誰かって誰よ。わたしは突っ込みたかった。違いないってどんな自信なんだか。わたしのパートナー、グレイらしいといえらしい。

「とにかく、だ。いつまでもここで油売ってないで、外に出て仕事しろ。お前がそんなんだから、税金泥棒と罵られるんだ。公務員は働いてるってところを市民にアツピールして来い」

クルップ局長はわずらわしそうに手を振る。これ以上グレイが局長の機嫌を損ねない為に、早く局長室から出たほうが無難ね。

「行きましょ、グレイ。局長の言うとおり、わたし達が優秀な公務員だって事を証明してあげましょうよ。そしたら、ジョニーも見直してビールの一杯もおごってくれるかもしれないわよ」

グレイはわたしの話もクルップ局長の話も全然聞いてなかった。何故って、新しく貰った情報凍結銃に夢中。嬉しそうに弄くり回してる。

「う、ああ。分かった、行こう。家に帰るんだっけ？」とグレイ。やっぱりまったく聞いてなかったみたい。ほら、早く行くわよ。そう、資料も忘れずにね。

わたしはこれ以上、グレイが失言しないうちに早く部屋を出るよう急ぎ立てた。後ろからクルップ局長がにらんでるけど、忘れる。ようは仕事をさせればいいんだ。このぐうたら男に。

入ってきたドアをくぐって廊下に出る。よく見ると、蛍光灯が一個切れてる。さすが、万年金欠部署。太陽中探したって、ダイオード以外の照明使ってる公共施設なんて情報管理局ぐらいなものじゃないかしら。

エレベータだってそう考えてみると、なんだか薄汚れている気がする。

今度はボタンを押してもなかなか来ない。グレイは口笛吹きながら、情報凍結銃で近くの花瓶を撃つ真似なんてしてる。安全装置は、ちゃんと掛けてるみたい、一安心。

やっとエレベータが来た。今度は人が乗ってる。事務のマリーともう一人は知らないスーツの男。

「はあい、マリー。元気してる？　うちのグレイは馬鹿なのに元気だけはあつて困っちゃうわよ」わたしが出し抜けに言う。

マリーがちょっと、五センチくらい跳ね上がって、きよろきよろした後、グレイを認めて、思い出したようににはにかった。

この子はもう二年の付き合いになるっていうのに、わたしがいきなり話しかけると驚いてくれる希少な人間だ。根が純なんだろうか、かわいい。

でも、グレイがでれでれするのは許せない。グレイはわたしをつついて、駄目じゃないか驚かしちゃ、なんて言ってる。ふざけるのもいい加減にして。

「ほら、もう五階着いたんだから降りるわよ」

わたし達が降りたのは、情報管理局ビル五階にある情報統合センター。太陽中の情報が集まる場所。ここのなら、クルップ局長から

受け取った資料以上に精細な情報が手に入る。

グレイはトコトコ歩いて自分のデスクへ行くと、わたしを外して中央コンピュータに繋いだ。

わたし、ユリシーズ社製高性能パーソナルコンピュータ内蔵型サングラス「U226」、に寄生する情報生命体。それがわたし。

今はペネロペって名乗ってるし、そう呼ばれるのが好き。

情報生命体は他の物質を媒体として、この宇宙に存在する。正確には太陽系、しかも詳しく言えば太陽限定。他の場所では情報生命体の目撃証言、って言っても目に見えるわけじゃないけど、一切無し。

わたし達は、その物質の記録に寄生する。全ての物は情報、宇宙に存在する情報の塊。宇宙という本に書き込まれた文字と言ってもいい。その文字に紛れ込む存在、それがわたし達、情報寄生体と人間から呼ばれる所以。

もっと言えば、わたし達はその記録にも干渉できる。言うなれば、編集者のような存在になることも可能だ。そこに在る情報を別の情報と入れ替えたり、部分的に情報の読み取りを妨げるようにしたりでも、実際は万能なわけじゃない。

だってわたし達は本当の宇宙の著者じゃない、まがい物にすぎないから。やり過ぎれば、復元力が働いて、わたし達ごと改変箇所は修正される。

その方法もあんまり優雅なものじゃない。角の尖った消しゴムで丁寧に書き直してくれればいいのだけれど、宇宙はそんなに甘くない。修正方法は至って単純、ホワイトをぶちまけるだけ。周囲一体真っ白け。

現実にはどうなるか、たとえば、空間が爆縮したりする。周囲は凄まじい破壊の嵐。塵一つ残らず消える。

もちろんやり過ぎれば、の話だ。細かい部分をゆっくり改竄するくらいなら、影響はほとんどない。復元力が働く境界線は曖昧なので、調節にはひどく気を使うけど。

それでわたしは、このU226に寄生してる。わたし達は単体では存在できず、必ず媒体を必要とする。当たり前だ、媒体も無しに情報は存在しえない。

おかげでこうやって中央コンピュータにアクセスして必要な情報を引き出すこともできるわけ。

ジェイムズ・バルザク、二十七歳、既婚、しかし配偶者死亡により現在は独り身。住所は、サンスポット市第八区ミナス446、21。職業、戦略宇宙軍第三師団技術士官中尉、三ヶ月前までは。現在は無職。突然軍を辞めた理由は、時を同じくする妻の死亡が原因か。しかも、辞めたと言っても円満にというわけではないようだ。

勤務外に基地に戻り、私物の一部と軍の第五級機密書類を持ち出し、それ以後消息不明になり、除隊処分。持ち出した書類は機密と言っても第五級、紛失漏出したところで、三ヶ月も経ってしまうと意味を成さないものね。だから、軍警察も熱心に捜査はあまりしなかったよう。軍に所属している間は、謹厳実直な軍人の見本のような男だったらしい。

脱走の理由は、個人的なものだろうと締めくくられている。これだけの期間が過ぎれば、既に恒星殻上に潜伏していると考えるほうが不自然だ。恒星殻上空に張り巡らされた整極性電磁バリヤーは、外側から来るものは強固に退けるが、内側からのものはむしろ押し出すように働く、脱出はそう難しいことではない、一生ここへ戻らないつもりならば。

そればかりは本人に聞いてみないと分からないだろう。でもこれぐらいは、クルップ局長から受け取った資料にも載っており、分析の材料は手に入った。

さらに管理局権限で今日の行動を検索。情報管理局の情報収集能力は警察、軍すらも上回る、その分陽の当たらない部署だが。

クレジットカードの使用状況や、街中に設置された監視カメラなんかで居場所も特定できる。写真と照合。本人と思しき人物は現在、エアカーで区外に移動中。

「なあ、何でもこいつ区外に移動してるんだ？ あんなとこ何も無いのに。ピクニックかな」グレイが言う。

そんなこと、わたしにだって分らない。でも、もしかしたら妻を亡くしたショックで、区外にある整備用エアロックから投身自殺なんてことも考えなくも無い。ピクニックという可能性は完全に否定できるけど。まともな神経をした人間なら、金属の地肌むき出しの区外の地面の上でピクニックしようという気にはならないだろうから。

というか、クルップ局長が言ってた、恋人だった物って奥さんのこと、かしら。

恐らくそうなのだろうけど。

「とりあえず、追いましようよ。もし、自殺しようとかしてたら止めて話を聞くの。別の用事だったら様子を見ましよう」わたしが言う。

「面倒だな、なんか。今回も警察に協力仰いでもいいって書いてあるし、警察にやらせようぜ。そのほうが楽だ」

「そうね。一人くらい応援は必要かも。張り込みましよう。何か尻尾を出すかもしれない」

「全部任せればいいのに」ぶつぶつ。「家帰って寝たい」

「いいから！ 全部任せるのは駄目。わたし達の仕事が無くなっちゃうでしょ。クルップ局長になんて言い訳するのよ」

グレイに接続端子を引っこ抜かれながらわたし。

「じゃあ、ドーソンにまた頼もう。あいつ、いい奴。俺、結構好き。俺が寝てても仕事はちゃんとやっててくれるし」

嬉々としてグレイが言う。

「ドーソンにはいい迷惑ね。あなた絶対嫌われてる、断言するわ」わたしはドーソンに同情的だ。

ひよんなことからわたし達の仕事を手伝ったのが運の尽き。グレイがサボってても生真面目に仕事するもんだから、便利屋扱いされて、毎回あたし達に付き合わされる。

そんなことお構いなしに、グレイはドーソンのPWPParser
onal Wearable computer Phoneに
繋ぐ。ドーソンがわたし達にPWPのナンバーを教えてくれたこと
はないが、管理局の情報統合センターはどんな情報でも手に入る。
PWPのナンバーくらい何でもない。

『こちら、ドーソン・ハルだ。あんた、一体誰だ？ 何で俺のナン
バー知ってるんだ』

こっちのナンバーは向こうに登録されてないはず。だから疑問を
持つのは普通だと思う。

『お前の娘は預かった。返して欲しければ、チーズバーガー三つと
フライドチキン一つを持ってこちらが指定する場所に来い。娘はパ
パを恋しがって泣いてるぞ。娘が酷い目に遭うのが嫌だったら警察
には知らせるんじゃないぞ』

まあた、悪ふざけを始めた。グレイはいちいち不真面目にならな
いと死んでしまう病でも抱えているのだろうか。

というか、ドーソンに娘がいるのかすらも定かで無い上、警察に
連絡するなど言ったところでドーソン自身が警官なのに。

『グレイか？ そうに決まってる。俺の知ってる中でこんな馬鹿げ
た事するのはお前ぐらいだ。だいたい俺の娘はもう成人してる。
しかも、保安官として、俺の部下として、サンスポット市に奉職し
てるんだ。俺を恋しがって泣くわけないだろうが』

『なんだ、つまらん。何でもいいから、また仕事手伝ってくれよ。
これ情報管理局員としての正式要請ね』

当たり前のようにグレイ。指ではくるとペンを回してる。

『無理だ。俺は忙しい。他を当たれ。お前の相手なんて二度と御免
だと前に言っただろうが。忘れたのか』

ドーソン刑事は声が荒い。やっぱり怒ってるのかしら。当たり前
だけ。

『照れ隠しは別にいらないぜ。俺達の仲じゃないか。遠慮はいらな
いさ』

『お前は少しでも遠慮というものを学べ。少ない脳容量をもつと有効活用しろ』

ドーソンたら、完全に頭にきてるみたい。 그레이のこの態度で怒らない人なんていないはず。 一種の才能と言えるかも知れない。

그레이は回していたペンを落つこととして、床を見回してる。

『はい。 久しぶり、ドーソン刑事、ペネロペです。 그레이のことは謝るわ、勝手にナンバーを調べたことも。 でも、応援が必要なのなら一人でいいから、誰か寄越してくれないかしら』

代わってわたしが話す。 なんか、飴とムチみたいな感じ。

もちろん、わたしが飴で 그레이がムチだけど。

『……言つとくが、こっちだって人手が足りないんだ。 半人前のやつでいいなら貸してやる。 俺の娘を行かせる。 まだまだ経験は浅いが、素質はあるんだ。 鍛えてやってくれ。 ああそれと、もし 그레이がケイシイにちよつかい掛けやがったら、情報管理局ビルに”特殊^ケルベロス^ル捜査突入班”を突っ込ませるから覚悟しろと言つといてくれ』

おお怖い。
ケルベロス

”地獄の番犬” と言えば泣く子も黙る自治警察機構の特殊部隊、そんなの本当に動かせるわけないけど、ドーソンの本気だけは伝わった。

『オーケー。 じゃあ、こっちから向かえに行くわ。 一応、銃は持たせて。 何があるか分からないから。 身辺調査だけのつもりだけど、いざって時のために』

『銃ね、止めといたほうがいいと思うがな。 我が娘ながら、とんでもないデンジャラスビューティに育てちまったもんでね』

複雑そうな声だ。

『あなたの娘が射撃が下手なんて信じられないわね。 でも、 그레이がいるから戦闘力には別に期待しないから大丈夫よ』

『そういうんじゃないんだが……。 とにかく気をつけてくれ。 タフな娘だから、荒っぽいのは平気だと思いがな』

わたしは『三十分くらいで行くわ』と言って通話を切った。 グレ

イはわたしとドーソンが話している間は手持ち無沙汰に再びペンを回していた。

「ドーソンは手伝えない。でも娘を貸してくれるって」わたしが言う。

「わああ、ドーソンの娘か。どんなマウンテンゴリラだろうな？」
たしかにドーソンは力強い顔立ちをしてるけど、流石にそれはないんじゃない。

でもまあ、たとえ半人前でもドーソンの娘という人物なら背中を預けられる気がしないでもない。得体の知れない新人よりは数倍マシね。

「失礼なこと言ってないで、さっさと行くわよ。自治警察ビルまで三十分もあれば充分到着するでしょ」

今日の天気通告は曇りのち雨。これで三日目だ。気象のローテーションも、もつと過ぎやすく組んでもらいたいものね。

わたし〓U226は防水だから気にはならないけど、グレイの場合は天気が悪いと晴れの日の二倍は仕事をサボろうとするんだから。もつとも、晴れの日だって昼寝してばかりだけど。

グレイはU226〓わたしのズレを中指で正すと、情報統合センターの出口に向かった。

？
(前書き)

続きです。

(HPより転載)

？

俺は誰を愛しているのか？ 何故愛しているのか？

ジェイムズ・バルザクにとっての専らの関心、近頃ずっと考えていることだった。

妻のマリリンは、貞淑だ、美人だ、従順だ、両親は金持ちだし、彼女自身が俺と結婚するまではキャリアウーマンとして俺より高給取りだった、文句の付け所など、ない。

宙軍技術士官の俺は、基地にいる時間のほうが自宅にいる時間よりも長い。だが、家に帰れば彼女が温かい飯を作って待っていてくれる。

例外なんてない、必ず。

宙軍の同僚には、いつも羨ましがられる。それが、俺には誇らしきもある。

俺も彼女の為に、基地から帰るときは必ず、何かプレゼントを買う。これにも例外はない。それは、観葉植物だったり、マグカップだったり、アクセサリーだったりするが、彼女はそれが何であつても喜ぶ、俺からの贈り物というだけで嬉しいらしい。

休みの日にはいつもピクニックへ行く。近所の公園だったり、たまに区外と区内の境界辺りまで行くこともある。

大抵の場合、気象管理局は週末に晴れを持つてくる。大昔の習慣に従つて、太陽自治区の大半では仕事を週休二日に定め、土日とその休日を持つてくるのが一般的になつていているからだ。

ダイソン殻の天蓋には、地球のものを模した蒼空が広がる。

中には、こんなものは偽りの空に過ぎないと言う者もいるが、生まれた時からこの球殻で育っているし、地球の空など見たことがある人間などこの都市には存在しない。

よしんば、現在の地球へ行ったところでそこに広がるのは、汚濁と放射能で爛れた荒野と黒く濁った死の海、巻き上げられた粉塵で

空は閉ざされ、生物は死に絶え、動くものは地球環境観察用自律機械が各大陸に数体ずつ。

本物がそんなに好きなら、勝手に地球へ行つて、勝手に放射能に塗れて死ねばいい。

地球への立ち入りは、そんなに難しいことじゃない。行政府に届出を出せば容易に許可が下りるだろう。適当な理由、例えば地球に生態系の回復状況について観察と研究を行うとでも言えば、僅かばかりは補助金さえ出る可能性さえある。

それでも、誰も、本物を実際に求めて行くやつなど、俺は見たことも、聞いたこともない。

口先だけで本物を求め、偽物を嘲る人々が多い。だが、彼らはここに満足している。普通に暮らしていれば、飢えることもない。病になれば、無料で治療を受けられ、子供達へ教育は無料で与えられ、不自由なことは何一つない。

彼らが引き合いに出す偽りの空さえ、見た目には本物となんら変わりはなく、天候は気象管理局でコントロールされ、天気通告さえ見逃さなければ干した洗濯物を大慌てで取り込む必要もない。

不満がないことが不満、文句を言う捌け口を求めて、完璧であることにけちをつけているに過ぎない。

現状に満足していることを悟られたくないだけ。人類は常に進化し続ける選ばれた存在である。彼らは、自らの慢心と失われたフロンティアスピリッツを認めたくないのだ。

若い頃は俺もそうだった。しかし、今は違う。安定したこの生活に愛着が湧いている。冒険と進化を求める若い心は去り、ささやかな、妻との変化のない生活に満足している。

適当にレジャーシートを広げて、適当に弁当を開き、適当につまみ、適当に飲み、適当に景色やら何やらを堪能したところで帰途に着く。

そうしていると俺も彼女も楽しい気分になってくるのだ。

家に帰って、ワインで乾杯し、それなりに気分が盛り上がったら

ベッドへ、大抵はいつもより好い。次の朝は彼女の作った朝食を食べ、基地へ戻って仕事。

その月末も似たような予定だった。

基地から帰る途中、立ち寄ったレンタルホロディスク店で、ミリ・ブライトに遭うまでは。

エアカーを駐車して、店に入る。マリリンから頼まれていた、新作のディスク。

二人で、居間にある、再生装置で観るのだ。おれ自身もホロムービーは、割と好きだ。

旧作コーナーを当てもなくふらふらと見て回った後、本命を探して新作コーナーの角を曲がる見覚えのある顔があった。

幼馴染で、初恋の相手、初めて付き合った女性、死んだはずの、そして何より無級市民の、ミリ・ブライトがそこに立っていた。

彼女は死んだ。質の悪い三級市民が、ふざけ半分でスラムに火を放った。ミリもミリの家族も、煙にまかれ、炎に焼かれ、死んだ。

法律上、無級市民は存在しないものとして扱われる。存在しないものを幾ら殺そうと市民たちは罪に問われたりしない。自治区民管理法ではそうになっている。

そんなことは日常茶飯事、誰も気にしない、だから俺も気にしない、すぐに忘れる、そう思い込むことにした。

おかげで大した動揺もなく、むしろ事情を知る友人には驚かれたものだった。

だった、過去の話だ。それで良かった。彼女、ミリ・ブライトが再び俺の前に現れなければ。

再開の言葉は不思議なほど、あっさりしたものだった。

「よう、久しぶり、ミリ。何年ぶりだったかな、君が死んでから」
君が死んでから。おかしなその言葉にも違和感はあまり感じなかった。

「ええ、久しぶりね、ジム。会いたかったわ。貴方のこと、探していたの」

ミリの言葉にも淀みはないし、迷いも無かった。

「一つ教えてくれ。何で君は俺の前に現れたんだ？」

何故生きているのか、ではない。何故現れたのか。

俺が理解出来なかったのは、その部分。

彼女、ミリ・ブライトが死亡、少なくとも俺がそう判断してから、十年以上は経過している。

火災のときに生き残っていたのなら、すぐに無事を知らせなかった訳は？ 事情があり、身を隠していたにしても十年間も連絡が無いことは、どう考えてもおかしい。

不自然、且つ理解不能、思考停止。

「何でだと思う？」

「さあ？ 俺には見当もつかないね。ただ、言えるのは、もう君を手放す気は無いってことだけ」

謎、疑問、懸念材料、数え切れない不安はあれど、その気持ちは間違えようがなかった。

自分の、自分だけの心。そう、そのはずだ。

「奇遇ね、わたしもよ」

彼女は、嗤った。

その琥珀色の瞳に吸い込まれた気がした。

吸い込まれ、その先で造り変えられ、吐き出され、再び其処に存在した。

（改竄、訂正、修正、固定。作業完了。存在情報、思考情報、再構成完了。造り変えた部分は微細。復元力の発生は感じられない。順調、順当、異常無し）

「わたしの為だけに存在して」

「いいとも」

謎、疑問、懸念、不安どれもこれも綺麗さっぱり、消えた。完全な消失。

その後、彼女とは連絡先を交換して、別れた。

終始彼女は機嫌が良かった。まるで、ずっと欲しがっていた玩具

を手に入れたみたい。俺と離れることも嫌そうだった。俺の気持ちとは関係の無い場所で。

家に帰る前に、一旦基地へ戻った。

顔馴染みの憲兵には、忘れ物を取りに来たと言い、中に入った。軍用PWP、IDカード、銃、軍施設に立ち入れるキーカード等。全てを持って基地を出た。

半分以上の品は基地外持ち出し禁止だった。デスクの上の妻の写真には見向きもしなかった。

俺は、家に帰るといつもと同じように妻に接し、妻もそうした。ワイングラスを傾けながら、ホロムービーを楽しんだ。俺が何の面白みの無いシーンでもくすくすと笑っているのを見た妻に「今日は、貴方、やけに陽気ね。何かいいことでもあったの？」と聞かれた。

「ああ、あつた」とだけ俺は答えた。嗤いは止まらなくなっていた。ほろ酔い気分のまま、彼女を散歩に誘った。夜の、散歩。

初めて夜歩きに誘ってきたのは、確か妻だった。サンスポットの管理された夜には、いつでも心地よい夜風が吹いている。

近所の川縁を歩く。整備された遊歩道。なのに、あまり整った印象は受けない。綺麗だが、冷たくはない。

澄んだ水には清掃用ロボットが、数匹泳いでいた。無骨な機械丸出しの姿ではない。魚類やら両生類のリアルな模造品。中には本物も混ざっているのかも知れないが。

素人には、分からない細かな様子で分かる。宙軍技術士官の自分には。夜陰を透かして目に映る、薄い溝、点検用の開閉部分。計算しつくされ、パターン化され、プログラミングされた動き。

そう考えると澄んだ水も、潤滑オイルにしか見えなくなってきた。見た目は綺麗な川に、ツギハギだらけの住民たち。

隣を見ると俺よりも酔った様子の妻が腕にすがり付くようにしている。普段はそれほどアルコールを摂取したがらない妻に、無理に飲ませた。

安心しきった目。川を泳ぐ機械のガラスの眼球とは違う。生き物の目だ。

その妻をゆつくりと腕から引き剥がし、困惑した様子の彼女を川へ突き落とした。

もつと溺れてもがく、かと思っていた。しかし、その様子もないさほど深くはないただの小川。川底の石に頭部を強打し、意識不明、溺死。

それが数年連れ添った妻のあつけない最期。数年、何年だったのかすら、最早思い出そうともしない。

幸せで、何の意味も、目標も変化もない生活の終焉。

俺は足早に、近くの駐在所に急ぐ。

歩行を加速させた得体の知れない何かは、もしかしたら妻への愛だったのかも知れない。

警官に話すことはもう考えてある。

妻が酔って川に落ち、溺れたと。自分も飛び込んで助けようとしたが、やはり酒が入っていて危険だから、人を呼ぶことにした。近くの民家は、光がなく。呼び鈴を鳴らしても、家人は寝入っている様子で反応がなかった為に、最寄の駐在所へ来たと。

俺が妻を殺したのではない証拠は無い。

同じように、殺した証拠も無い。付け加えて言えば、殺す理由も無い。冷静な対応は、軍人であることを鑑みれば妥当。

残りの問題は、この顔に張り付いた薄ら笑いをどう消すかだけだった。

？
(前書き)

(HPより転載)

？

그레이が飛ばすエアカーは、約束の時間より十分以上早く、自治警察ビルに着いた。

屋上の駐車スペースは使わない。一応、太陽自治区警察機構の総本山と言える場所、署員以外が入るには面倒な手続きが必要だし、忙しく働く公僕たちで出入りが激しくなっていて、駐車スペースにも事を欠く。

とは言っても、並の人間ならそちらを選ぶだろう。 그레이のように、幾ら広いとはいえ、堂々とエントランスのど真ん中に駐車する人間はいない。

わたしが、恥ずかしいから、せめて端に寄せはしたけれど。やはり周囲の目が痛い。

でも、ドーソンの部下「娘には分かりやすいかも知れない。無意味に目立っているわけじゃないのよ、と自分を慰めもする。

「どうする？　 그레이。待つのか？　随分と早く着いてしまったけれど。それとも、連絡して呼ぶ？　別にそれでも問題はない、というより、その方が迷惑も掛からない気もするし」

わたしの提案。こんなところで馬鹿みたいに一目を引いているのは嫌。さっきも警察のお偉いさんらしき人のリムジンにクラクシヨンを鳴らされた。

鳴らし返した 그레이を叱り飛ばして、移動させた。 みつともないったら、ありやしないんだから。

普通の署員は屋上の駐車スペースにエアカーを停め、署内に入る。エントランスにエアカーで乗りつけるのはそういったお偉いさん方がほとんどだ。

大抵は黒塗りのリムジン。わたし達みたいなスポーツタイプはまったく見当たらない。まさに場違い。

「どっちでも。ほら、ペネロペ、あのおっさんこっち見てる。顔真

っ赤にして茹でダコみたいだ。うわっ、こっち来んな」

「馬鹿。あれは副署長よ。さっさと車移動して。ほら向ここの端が空いてるから。邪魔にならないところに、早く」

わたしが急かす。グレイは車内ですら、じつとはしていられないようで、いつの間にか再びエントランスの中心方向へエアカーを移動させていた。

グレイは副署長を挑発するように、空吹かしすると渋々ながらもわたしに従った。

「番号調べたから、ドーソンの部下」娘にかけなさいよ。わたし、これ以上恥を晒したくないから」

そう言って、サングラスの内側にPWPのナンバーを浮かび上がらせる。

グレイはエアカーのナビステーションに差しっぱなしだった自分のPWPを抜き取って番号をプッシュする。

次々と押されたボタンがリズムミカルにドレミを奏でた。大きい音。グレイは何故か、この音量を高くしてる。前に聞いたなら「前の職業じゃ目立つことは御法度だったから、その分を取り返してる」とかわけ分かんないこと言ってた。

とにかく、グレイの意味不明な（少なくともわたしには）行動にはグレイなりの理由が存在するらしい。それでわたしに、周囲の人々に、迷惑が掛かるのは考えものだけれど。

「あー、情報管理局の者ですが、着いたから早く出てきて。なんか、ペネロペがうるさいから。でも、ここにいと目立って楽しいから、別に遅くてもいいよ」

呼び出し音が三度と鳴らないうちに、返答があった。

グレイはいきなり、聞き捨てならない、且つ矛盾しまくったせりふを吐き出している。

「あ？ わけ分かんねえよ、てめえ。俺がてめえらを手伝ってやるんだから、そっちから挨拶に来るのが筋だろあが？ ごちゃごちゃぬかしてないで、さっさと上がってこい」

ずいぶんと甲高い、高圧的な返事が返ってきた。

「どうやら、グレイは番号を間違えて掛けてしまったらしい。」

「どうやったら、警官の番号とヤーさんの事務所の番号とを間違えられるのだろうか？ それは天文学的確率なんじゃないかなんてわたしは思った。というより、こんな人種が未だに存在していることにびっくりよ。」

グレイもおかしいことは分かるようで「ハニー、番号聞き間違えたみたいなんだけど」と、まともなことを言い出した。

わたしは再びグレイの眼前にナンバーを表示してあげた。

グレイはそれとPWPの画面に表示された、現在コール中のナンバーを見比べてる。

一瞬で済む作業のはずだけど、グレイはずっとうんうん唸ってる。それもそのはずで、わたしが検索したナンバーと現在コール中のナンバーが、完全に同一のものだったから。

「なんか、俺、間違っていないように見えるんだけど」

かなり、自信なさげにグレイがつぶやく。

「ええ、わたしにもそう見えるわ。どうやら検索システムに異常が発生したみたい。丁重に謝って、通話切っていいわよ。しょうがないから、ドーソンに掛けて聞いてみましょう」

わたしが現在、宿代わりになっているこのU226は、型は古いながらも、耐火、耐水、耐圧、耐ショック、耐無重力、耐高重力と言った性能に秀で、装着者が死ぬことはあっても、U226が破損することは無い、というCMで有名だった商品だ。

それが壊れるというのは、運がないとしか言いようがない。

『おい！ てめえら、全部聞こえてんぞ！ 俺を馬鹿にしてんのか？ 俺がお前らの探してる、ドーソン・ハルの娘、ケイシイ・ハルだよ。間違つてねえつつの！』

PWPから、聞こえてくる怒鳴り声にグレイはきよとしたまま。

わたしだって、あっけにとられたわ。だって、質実剛健、職務に

勤勉なドーソンの娘が、こんな男言葉の荒っぽい娘だなんて。

でも、ナンバーは恐らく間違つてなくて、相手も本人だと名乗ってる。

「ペネロペ、切っていい？」

「ちよつと待て、なんでそうなるんだよ！ ああ、もうめんどくせえ。お前ら、どこいるんだ、今？」

「エアカー用のエントランススペースだけど」

勢いに飲まれた 그레이 が、思わず答える。

『おし、分かった。そこ、動くんじゃねえぞ！ 逃げやがったら、黒点の果てまで追いかけて、てめえの汚ねえケツにレイガンぶちこんで、太陽系外まで吹っ飛ばすからな！』

そう言つてドーソンの部下、娘、ケイシィは通話を切った。

とりあえず、その甲高い声から判断して、男という線はなさそうでも、限りなくチンピラに近い感じはする。

ドーソンは素質はあるつて言つてたけど、それはただの親馬鹿？ それとも、本当に刑事として才能あるつてこと？ さっきの感じじゃ、捕まえるよりも捕まる方が似合つてそうだったけど。

「……ペネロペ、今回は二人だけで調査したい気分なんだ、俺」

「知らないわよ、わたし。馬鹿同士仲良くしたら？ 案外、気が合うかもしれないじゃない」

わたしは投げやりに言つた。どうせ、わたしは補佐に過ぎないし、人間でもない。面倒な人間関係は 그레이 にまる投げ。

こいつが、その、あんまり言いたくないところにレイガンを入れられたつてわたしは別に困らないし、むしろいい気味かも。

普段から、不真面目な 그레이 にはいい薬かも知れない。

その時、相当な重量のものが地面に激突する轟音と地響きが聞こえてきた。場所は、そう遠くない。

辺り一体はガヤガヤし始めるが、何故か慌てた様子はない。ここではあの音は日常的にしているのだろうか。

（おい、また、あの”アイアンガール鋼鉄娘”だぜ）（やべえ、俺、今日は裏に停

めてんだよ）（ご愁傷様、とりあえず愛車の無事を祈つとけよ）（うるせえ、てめえだつてこの前、買ったばかりの新車、ぺしゃんこにされてべそかいてただろ）（クソッ、ついてねえぜ、今日は）（ははっ、後で主任に文句言つとけよ）（馬鹿、あの人には世話になつてんだ。そんな事言えるかよ）（主任も、もう少し娘の育て方に気を配って欲しかったよ）（それはまったくだ。どうやってたら娘をあんな風に育てられるのか、見当もつかねえ）（少しってタマなもんかよ？ あの”鋼鉄娘”^{アイアンガール}が）（おいでなすったぜ、お前ら。静かにしねえとぶつとばされるぞ）

その内、ビルの裏手の方からやって来る人影が見えた。あの人影がさっきの騒ぎの正体かしら。まっすぐこっちに來てるように見えるんだけど。

太陽自治区警察機構保安官の制服を着ているのは分かるけど、だらしなく着崩され、履いているのは何故か軍用ブーツ。腰のガンベルトには制式の非致死性ショックガンではなく、これまた軍用の高出力の大型レイガン。よく見れば、電磁パルス手榴弾^{グレネード}だけでなく、破碎手榴弾^{フラグメンテーショングレネード}までぶらさげている。

電磁パルス手榴弾^{グレネード}は、特殊な電磁パルスで神経系にノイズを発生させ、生物を無力化する武器だが、数日間全身がびりびりする程度で致死性はない。しかし、破碎手榴弾^{フラグメンテーショングレネード}は完全な殺傷兵器。

別に、警察機構の保安官なら致死性の銃火器を使用することを認められているけど、彼らは犯人を傷付けずに逮捕することを名譽とする。だから、致死性の武器はあまり使いたがらないのに。

まるで、戦争でもしに行くかのような物々しさ。

「よう、お前が、管理局のお役人かよ？」

やっぱり目指していたのはわたし達だったみたい。エアカーの外にぼーっと突っ立っていたグレイに向かって話しかけてきた。

髪はショートカットで、ここ数ヶ月の間、床屋とも美容院とも縁のないグレイのぼさぼさ頭より短い。

身長は女性にしては高めだが、手足は細く華奢で、とても大型の

レイガンを自由に操れる雰囲気はない。

とても、さっきの爆音をたてたのがこの女性だとは思えない。

「いや、お前らと言ったほうがいいのか。情報生命体だったか？

あんだ。話は聞いてるぜ」

「そう。俺、グレイ。こっちはペネロペ。とりあえず、言っとくけど、逃げなかったんだから、ケツにレイガンぶち込むのは勘弁して欲しい」

グレイはさっきの脅しを気にしてるみたいで、さっきから片方の手を臀部から離そうとしない。いくらなんでも、それは冗談の範囲でしょ、と突っ込みたくなる。

ケイシイらしき女性は、グレイのびびりっぷりに笑っている。

「おいおい、ブラザー、おっとシスターもだったな。そんなに怯えんなよ。さっきのは冗談だ、仲良くやろうぜ」

「ペネロペ、こいつ意外といい奴かも」

「まあ、警察機構の人間が悪人なわけもないでしょ。こちらこそ、よろしく、^{アイアンガール}鋼鉄娘”さん”」

わたしはさっきの喧騒の中で聞いたケイシイのニックネーム？を呼んだ。

すると、とたんに顔をしかめる。

「やめてくれよ。その渾名、^{ニックネーム}あんまし好きじゃねえんだよ」と、ぶっきらぼうに言われた。

「ところで、さ。あの音は、何だったんだよ？　なんか重量のある物が地面に凄い勢いで激突したみたいなやつ」

グレイはさっきの音がまだ気になってるらしい。実はわたしも。なんか、ここじゃ日常茶飯事だったみたいだけど。

それに、あの音と衝撃の犯人は、ケイシイだったみたいだし。

「ん、ああ、あれか。近道、近道。オフィスの窓から、飛び降りた。どうせ、裏には人も滅多にいないしな。踏み潰す心配もねえよ」

どう飛び降りれば、あんな音が出せるのかしら。そもそもわたしの記憶だと、サンスポット市警凶悪犯罪課があるのって二十階だっ

た気がする。

「お前、丈夫だな。すごいすごい」

グレイは変なところで感心してる。けど、生身の人間が二十階から飛び降りられるわけがない。

「あつたりめえよ。俺のボディは軍用の最新型だぜ。それも脳以外は全部な。さすがに、屋上から飛び降りたら死ぬが、二十階程度ならどうってこともないぜ」

「つまり、フルメタルジャケツ全身機械化のサイボーグってことかしら？」

生身ではなく、フルメタルジャケツ全身機械化サイボーグなら納得がいった。大型高出力のレイガンもその華奢な腕ではとても操れそうに見えなかったが、サイボーグなら話は違う。さらに大型の武器でもやすやすと振り回せるに違いない。

「アイアンガール 比喻でもなんでもなく”鋼鉄娘”だったというわけね。

「どうだ？ 生身の人間と傍目には、区別つかねえだろ」

確かに、皮膚の質感は完全に人のソレ（安物の人工皮膚はもつとこう、てらてらとして、人工感に溢れている）だし、瞳もただの義眼で偽装したカメラアイでなく有機部品を使っている。関節の動きは滑らかで、動きは生身の人間よりキレがあるくらい。

「重量だけは、アンチグラビティメタル反重力金属を埋め込んでも誤魔化し切れねえんで、大の男二人分はあるけどな」と、なんだか恥ずかしそうに言う。一応、自身の体重は気になることらしい。

「それにしても、あのドーソンに娘、か。お前の母親の趣味は、俺には、ちよつとばかり理解しかねる。でも、それは個人の自由、か」
「違う、違う」と、ケイシイがぶんぶん手を振る。勢いあまって、隣に駐車してあったエアカーのサイドミラーをへし折ってしまう。
グレイは引いているし、わたしは少し呆れてる。とにかく、わたし達のエアカーじゃなくて幸い。

当の本人は気付いているのか、いないのか。表情も変えずにぺらぺらとまくし立てて来る。

「行政府公務員社会福祉協力制度ってあるだろ。その一環だ。親

父は、給料はそれなりに貰ってるくせに、謙虚なんだか知らないが、たつぷり溜め込んでやがったからな。四十歳以上、独身で、給与、貯蓄額ともに基準以上、人格評価A+ってことで親父が孤児院に居た俺の里親に選ばれたってわけだ」

行政府公務員社会福祉協力制度、言ってしまえば引き取り手のいない孤児を養育能力があると認められた公務員が養子として引き取る制度。

ある事自体は知ってたけど、本当に実施されてる制度だとは思ってなかった。

大体、いくら公務員だからって、養子を取ることまで強制できるはずもないし、進んで孤児を引き受けるお人好しがそんなにいるとは思えないから、有名無実の形骸化した制度だと思ってた。

だけど、あのドーソン刑事ならやるかも知れない。少なくとも、強制ではないにしろ通知が来たら、断れないはずだ。

でも、娘っていうのは、かなり意外。大抵は、中央コンピュータの調査の上で相性が計算、検討され、決定される。数少ない事例では、娘は女性の里親の所へ行く場合がほとんどだし、逆もまた然り。とは言え、このケイシイの様子を見る限り、中央コンピュータの計算はあながち間違っているとも言い切れない、むしろ最適なのかも知れない。

だって、この娘は普通の里親の下で普通に生活出来たとは思えない。会って数分だから、確かなことは言えないけど。

「つつても、引き取られたのは三年前だから、親子としちゃあ、日が浅いけどな。でも、俺を引き取ったのが親父で良かったよ」

ケイシイは、はにかみながら言った。ドーソン刑事にも教育の才能が多少はあったらしい。方向は大分間違えてるみたいだけど。

「まあ、んなこたあ、どうでもいい。仕事しようぜ、仕事。親父に給料分は働けて叩き込まれてんだ、これでも」

そう言いながら、ケイシイはグレイ（とわたし）をエアカーの運転席に押し込み、自分はそのまま助手席に座る。

女性とはいえ、全身機械化サイボーグのパワーと重量には、さすがのグレイもどうにもならない。大した抵抗もしない。そんなことより、しきりに助手席を気にしてる。どうやら、助手席のクッションが、ケイシイの重量で駄目になるのが心配らしい。

「そこ、昼寝のとき窪んでたりしたら、嫌なんだけど。空気イスとかで座ってくれない？」

グレイ、あなたも相当無茶言うわね。もちろん、ケイシイは無視はせずに、グレイをはたいて、エアカーの発進を促す。

「とりあえず、区外に向かいましょう。調査対象が何の目的で区外へ出ようとしているのか、それを知るのが先決。別に、今回は接触を禁止されていないから、観光客を装って話しかけても良いし」

かなり稀ではあるが区外への観光、そういったことを目的にする者がいないわけでもない。それとなく装えば、気付かれることなく相手の意図の一端を掴むことができるかも知れない。

「面倒くさい、けどやるか。給料欲しいし」

「さっさとドンパチして帰らせてえぜ。区外だったら、焼け野原にしたらって構うもんか。思う存分、ぶっ放せる」

やる気のない男に血の気が多すぎる女と冷静沈着なわたし、この羅列だけで誰が重要な役目を担っているかは、分かって貰えるに違いない。

「とにかく……、給料分の仕事はしなさいよ？」

この、わたしと同じセリフを多用しているに違いないドーソン・ハルの苦勞が忍ばれる。

その言葉を聞いてか聞かずか、グレイが一気にアクセルを踏み込んで、エアカーを急発進させる。

ケイシイは「ヒュー、悪くない性能だな。カスタムしてあるのか？」なんてグレイに言ってる。エアカーの改造は違法。警官が楽しそうに聞いていいのかしら。まさか、返答次第で逮捕するなんてことはないだろうけど。

そのままわたしにはよく分からない、興味もない話を二人は興奮

した様子しゃべる。

前見なさいよ、 그레이。事故にあって一番危険なのは、生身のあなたなんだから。

「いきなりで悪いんだけど、聞いておきたいことがあるの。ちょっといいかしら？」

二人の会話に割り込む。 그레이は当たり前だけど、 ケイシイも特に嫌な顔はしない。

「ケイシイ、あなたの体のことなんだけど。……あんまり話したくない事かも知れないけど、一応聞いておきたいの」

わたしは、おずおずといった調子で尋ねる。彼女の身体が失われた理由について。とはいっても、どうしても彼女が嫌がる場合は、やめるつもりだった。

「ああ、こいつね。いいぜ、別に隠すようなことでもねえしな。俺の生身の身体は、俺が九つの時に僅かな肉片を残して、吹き飛んだ。太陽系共生派のテロだったよ。両親はそれでお陀仏、俺だけが奇跡的に生き残った。まあ、孤児院で与えられてたのは脳味噌を覆う箱と重力子制御技術を用いた牽引ビームグラビトンテクノロジーつきのマニピレータぐらいだったんで、さすがに親父が貯金はいいて、高性能な人型の素体を用意してくれたのには感謝したけどな」

予想はしていたけれど、壮絶、と言って差し支えない人生。 그레이の底辺人生と比べても見劣りしない気がする。

でも、それを恨んだりはいしていないように感じる。そもそも、逆境を大して逆境と感じていない節があるみたい。その点は 그레이も似たようなもの、自分に与えられた状況をその都度吟味して、感傷は抱かず、実力で道を切り開く。

その先に何が待っているようにと、ね。

今さえ切り抜ければ、未来は未来で何とかなるさが彼らの思考の基盤となっているに違いない。

「へえ、ドーソンが。きつと、いつも射殺してる犯人の分、善行でも積もうとしたんだな。俺はそんなことしない。殺すのも、殺され

るのも俺達の自由意志、だ」

グレイはやっぱりズレている。論点が噛み合わない。でも、それも人間の個性というやつだということは既に理解している。もしかしたら、わたしの理解もズレているのかもしれないが。

「まあ、おかげで俺も自由に社会不適合者を存分に始末できるってわけだ。俺もベテランの刑事になって落ち着いたら、孤児を引き取って犯罪者のぶっ殺し方を教えるのさ、親父みたいに。それで太陽も少しは平和になる」

ズレたことを言ったようで、グレイは真実を言い当てていたらしい。

結局のところ、グレイもケイシイも飢えた野獣のようなもの。体制に付いて自らの欲求を満たすだけの知恵があつたに過ぎない、それが一つにして最大の犯罪者との相違点なのだろう。グレイは体制との妥協点を見出すまで時間が掛かっているけど。

「あなた達って良いコンビになりそうね、わたしを入れてトリオかしら。でも、混ぜるな危険、のほうがいいかも」

「ふむん、俺はペネロペー筋。でも、この機械の塊とも仲良くはやれそう。ドーソンと同じくらい腕が良ければ」

機械の塊、とは普通のサイボーグが聞けば激怒するだろう、グレイに悪気がなくても。

だけど、ケイシイはそんなこと気にした様子はない。グレイと全く同じ理由、無関心である。他人の評価に左右されないのね。

「気に入ったぜ、お前ら、俺の舎弟にしてやってもいい。弾除けぐらいの役には立つたろ。事件解決のあかつきには飯奢ってやるよ」

やっぱり会話は噛み合わない。

あなた達、自己主張が強すぎよ。少しは周りの迷惑を考えたら？ 心（わたしにそんなものが在ればだが）の中で言ってみる。考えるだけなら、自由だ、恐らく発言も自由だろうけど。

だいたい、事件の捜査を手伝う事を依頼したのはこちらで、彼女のほうが協力者なのだが、彼女にそんな理屈は通用されないのだから

う。

つまりグレイもケイシイも本質的に、無級市民や一級犯罪者に代表される自由人と同じなのだ。そしてわたしも多分。

グレイがさらにアクセルを踏み込み、アルテミスを加速させた。

「飯、奢ってくれるのか？ 良かった、ペネロペ、少し心配事が軽減された。飯食わせてくれるなら、舎弟でも、何でも、なる。ところで舎弟って何だっけ、食える、ペネロペ？」

グレイ、舎弟は食べ物じゃないわ。いくらここが、太陽系至高の恒星殻だとしても、舎弟は食べ物だったりしない。

でもわたしはそんな野暮は言わないの。だって犯人を捕まえれば、誰も文句は言わないし、誰の舎弟だろうとグレイはグレイ、その事実が変わりはない。

「もつと、飛ばして。ご飯の種が逃げちゃうわよ」

無論、アルテミスはさらに速度を上げ、区外へ向かった。

？
（前書き）

（HPより転載）

？

恒星の発するエネルギーを最大限利用するため建造された人類史上最大の建造物、理論提唱者の名を取りダイソン殻と呼ばれるそれは、太陽の膨張によるホメオスタシスワールドの熱許容限界が訪れるその時まで、ダイソン殻地表に住む人々にエネルギーを供給しエントロピー増大の法則に乗っ取る熱量増加を赤外線放出で防ぎ、恒星の発するエネルギーを受けられなくなった太陽系内の惑星は冷え緩やかな滅亡への道を辿り、しかし宇宙は続いてゆく。

居住区から外れ、区外と呼ばれる、巨大な赤外線放出機械群がそびえ、球天体内部への点検通路を備えた地帯。

今日も放熱フィンは宇宙に赤外線を吐き出し恒星殻内部のエントロピー増大を防いでいる、ホメオスタシスワールドも健在。

ジェイムズ・バルザク、わたし達が調査している人物、情報生命体と関係している疑いの強い人物、彼は何故区外にやって来たのかわたし達には調べる必要があるわ。

居住地を抜けた後は、自然な酸素生産のための森林が延々と続いている。そして、その森林を抜けた先に、境界となるゲートがある。エアカーの進路を塞ぐ形で、巨大なゲートが姿を現す。区外へ通ずる門。あそこを抜けた先に待つのは、ほぼ死の世界。金属の森と金属の大地。

微生物と極僅かな施設警備員がいるだけ。

グレイがアルテミスをゲートの検問所に停める。検問、と言っても市民証明カードを持っており、監視電波発振装置を身に着けることを承諾しさえすれば、簡単に抜けることが出来る。

自分達の住む恒星殻を支える施設のある地域として、初等学習機関の見学場所としてもポピュラーなくらい。

グレイが自分とケイシイの市民証明カードをまとめて、警備員に手渡す。

「こんな場所でデートか？ 面白いもんなんでないぜ、ここにはそれとも、初等時代の思い出の場所でも巡ってるのかい」

男女二人の取り合わせを見た警備員が冷やかす。わたしの存在には当たり前ながら、気付いていない。

ケイシイが笑って言う。

「面白いこと言うな、あんた。俺がこの冴えない男とかよ。まあ、職業欄でも見ろや」

ケイシイの人工皮膚に包まれた指先が、鋭く市民証明カードの職業欄を指す。

グレイの物には太陽系自治区公安省情報管理局、ケイシイの方には太陽系自治区警察機構保安課、職業欄にはそう記されている。

「へえ、そっちのあんちゃんは管理局員かい。妙な取り合わせだな。犯罪者でも区外に探しに来たのか？ だがな、下に降りられちまったら追いかけるのは止めといた方がいいぜ。俺だつてここに勤めて十年になるが、下に降りたことのある奴なんて数えるほどしかないねえ。それも大抵、表層の歓楽街をぶらついて終わりさ。それでも、皆が皆口を揃えて、危なねえとこだつたつて言ってるぜ」

警備員は親切な男のように感じられた。顔と言葉では笑いながらも、声の調子は真剣なものだ。

区外の警備員と言えども所詮一般人だ。自由市民を自称する無級市民など、ただの無法者の集まりとしか感じられないに違いない。

実際、そういった者が大方を占めることも事実。警戒するに越したことはない。

「おっさん、いい人だな。だけど俺達は大丈夫だよ、多分。それと一応これも捜査の一環だから、発振装置は着けないで行くぜ」

グレイが言う。確かに捜査という名目が無くとも、政府職員であれば監視電波発振装置無しで、区外に入ることも許されている。しかし、本当の理由は着けるのが面倒くさいからじゃないかしら。わたしには、大体のグレイの思考が読めている。

「ああ、分かった。出入記録だけは残るが、他の監視措置は解除で

いいだろう」

物分りがいい警備員で良かったわ。だって、こういう所の職員で融通が利かないって相場が決まってるんだから。

この調子で、ジェームズ・バルザクもすぐに捕捉できればラッキーなのよね。

「ところでさつき、ここを男と女が抜けて行っただろう。何か、言ってなかったか？ こう、どこへ向かうみたいなことをさ」

ケイシイがとりあえず聞く。何か情報となる会話の断片でも入手できれば幸いと思ったのだろう。

警備員の男は、思い出そうと思案する様子、考え事をする時の癖なのか自分の耳たぶを弄っている。わたしは 그레이 にも変な癖がある事を思い出させられた。

考え事をする時、 그레이 が真剣に考えることなんて大抵はくだらないものだけど、レンタル屋のサービスマンがいつだったかとか、昨日まであったはずの耳かきがどこへ行ったか、とか。時おり追っている情報寄生体のこととか、むつかしいことを考えることもあるみたいだけど、それは稀だ。

でも、そういうむつかしいことを考えるとき 그레이 は風呂場に閉じこもる。なんでも徐々に頭がふんわりしてきて良い考えが浮かぶらしい、のぼせて倒れたことも一度や二度ではないが。

一種、解脱したような感覚らしい。解脱、というものが何なのかは、肉体と呼べる物を持たない情報生命体であるわたしには分からないが、身体から、いや煩雑な思考から必要とする情報と判断力だけが抜け出して、見えない手でそれをこねくり回すようなイメージと 그레이 は言っていた。

그레이 に言わせれば、わたしは常に解脱しているようなものらしい。羨ましいのかしら。わたしが。

風呂でのぼせて、タオルを腰に巻いただけの姿でソファでうんうん言っている 그레이 は、それでもどこか楽しそうだった。

たぶん、満足なのだろう、今の生活に。深く思案するより、軽薄

に現実を楽しむほうがグレイには合っているのね。でも、たまには深く考えて、それが無駄になることも楽しみの一つなのかもしれない。

「ああ通った、けど何処に行くかなんてことはさすがに分からんなあ。男の方は職業証明欄が軍人になってたんで、珍しいとは思ったが。あの二人は監視装置を着けて行っただから、調べようと思えば調べられるぜ」

男はそう言っただけで、情報端末を取り出した。黒いやつだ、警察や軍でも使われているもの。ぽちぽちとキーを叩いて操作する。すぐに画面に赤い光点が表示される。二つの光点らしいが、重なって一つに見える。

「こいつか。で、ここはどこら辺なんだ、一体？」

ケイシイも身を乗り出して聞いた。ちよつと、わたしのグレイにそんなに引つ付かないでよ、もう。警備員の男がいるのはグレイの運転席側だから、助手席にいるケイシイが身を乗り出せば、自然とグレイに覆いかぶさるような形になる。

でも、二人ともそんなことは全然気にも留めていない。わたしばかりシヨックを受けた馬鹿みたいじゃない。

「おい、やめてくれ。潰れちまう。おまえ、重い。自分の重さ自覚しろよ、ちゃんと」

グレイは気にしてるみたいだった、方向性が違うけど。でも確かに、外側はともかく中身はぎっしり金属の詰まったものにのしかかられたら重いに決まってる。

ケイシイは、悪い悪いと言って退いたが、太腿の上に膝をのせられていたグレイは痛そうに足をさすっている。さすがに、大人二人分の重量となるとかなりの重さらしい。実地体験する気には、普通ならないわね。

「おっさん、ありがとう。大体の方角が分かればいい、か。あとは適当にやれば何とかなる、きっと」

「お前も大雑把なやつだな、おい。そいつに逃げられたらどうすん

だよ。俺はただの手伝いだからいいけどよ。いや、俺の仕事じゃなくても追ってる奴に逃げられたら気分が悪いから嫌だな」

二人ともマイペース過ぎるわ。でも、バルザクと女の居場所は分かった。第三列放熱フィン群の中ほどね。

どうやら、下層部へのハッチも近くにある場所のよう。もしかして、殻内に下りるつもりかしら、予感めいたものが僅かによぎる。

グレイはアルテミスのアクセルを踏み、後ろでは警備の男と不釣り合いに大きなゲートが遠くなっていく。区外に通じたゲート、今は区内に通じるゲート。

分かっていたことだが、周囲に続くのは天を貫くように聳え立つ赤外線放熱フィンばかり、風情も何もあつたものではないがある意味もつとも生活感を感じさせられる風景ではある。あの不恰好な平べったい塔が無ければ地上、ダイソン殻は高温により生命のない死の世界になる。そう思ったからといってありがたみが増して楽しくなるわけではないが、暇つぶしくらいにはなるわね。

グレイが歌を口ずさみ始めた。一昔前に、中途半端に流行った曲、そうボーカルの使っていたマイクに情報生命体が寄生していて、わたしとグレイの二人で捕獲したのだ。グレイが、情報凍結して。今は情報管理局の奥深く、研究兼収監施設で眠っている、収監兼研究施設だったしら。

ありきたりな恋の歌、でもわたしは好きだ。だって何だか楽しくなる、こんな殺伐とした仕事をしていても。グレイと一緒にならもつと。

ケイシイはグレイの音痴に顔をしかめているが、わたしは気にならない。もともと、人間とは音の捉え方が違う。わたし達情報生命体は音声を振動ではなく、情報として捉える。グレイの歌には、大量の情報が内包されている。

その情報は無秩序であるかのように見えて、その実秩序だっている。グレイの情報存在としての断片が、声という媒体を通してこちらに伝わってくるかのような。わたしはグレイという情報の在り方

が心地良く感じる、不思議なことに。わたしから発生するこの情報は、わたしにも分析不能だ。でもその内分かるでしょ、グレイと過ごして情報をより蓄積すれば。本当にそう思う。

こうして、グレイや仲間の太陽人と共にわたしの同族が引き起こす事件を解決して回る日々もそう悪いものでもない。

彼らと共に行動することによって、わたしも彼らの一部のようになり、ともに新たな情報を、記憶を、未来を創出しているような気分を味わうことができる。

実際、わたしのような情報生命体は、自分でも完全に理解してはいないものの、世界言語とでも言うべき一種の情報構築言語を繰って存在の記述や現象の記述、アカシックレコードのようなものに書き込まれたと表現することが一番近い、それらに改竄を加え、構築し直す事が可能だ。

しかし、わたしに触れる事が許されるのは過去の断片であり、すでに構築されたものに改変を加えたり、分解と再構築の作業を行ったりすることだけであり、それは幼児がレゴブロックを一部組み替えたり、バラバラにして組み直したりするのと同じことなのだ。

わたしには、レゴブロックそのものを作り出す能力はない。あくまでも、既に在るものに手を加えることしか出来ない。わたし自身には未来を創出する力はないのだとも言える。

だからこそ。だからこそ、わたしののような情報生命体は人間の生活へ侵入し続けるのかもだろうか。人間に混じり、人間と共に行動し、人間に干渉しようとする。そうやって人による、存在、事象、未来の創出を共に感じることで、満足が得られていることは確か。そうわたしは思う。

けれど、それだけでは満足できない。そんな同族がいることも、また確か。

彼らは、人間の思考、行動、在り方、つまりはその情報変動による不確定性未来決定能力を観察し、理解することにより自らも同じ力を得ようとする。

彼らは人間になりたいのかも知れない。実体を持ち、未来を創出する存在に。いつまでもイレギュラーでいることに満足できないのだろう。ましてや、わたし達の改變能力には限界があるのだ、復元力という超弾性の壁が。

それも一つの進化の形だと思う。彼らは主体的に進化の階段を上ろうと試行錯誤を重ねているのだと思う。それは極めて能動的なものだ。そして、その獲得しようとする能力の未来的革命性はやはり進歩ではなく、進化というべきものとわたしは思う。進歩と進化の違いはその革命性にあるのだろう。漸化ではなく飛躍、確かにそれは素晴らしいものだろう。少なくとも、大きな変化をもたらすことは間違いない。

しかし、主体的行動を起こす事無く、間接的に未来を創出しようとするものもある。我々に元から備わっている改竄能力を最大限利用し、情報を生産させ得る存在、つまりは人間を操ることによって、自らの望む未来を創出しようとするものがそつだ。

彼らは人間社会に潜むのではなく、特定の個人に寄生する。依存すると言い換えても良いわね。社会という構造全体ではなく、その構造を支える柱の一つに取り付くのだ。多くの同族は、構造内部を漂いながら構造の仕組みを学び、自らのテリトリーにおける社会性を伴う集団としての創出能力の獲得を目指す。それは、彼らが情報寄生体ではなく、ただの情報生命体に過ぎないことの証明でもある。彼らは通り過ぎるだけなのだ。

でも、情報寄生体は違う。彼らは依存、寄生する、特定の個人に。彼らは、初めのうちは目標として定めた標的に完全に依存する形で寄生する。しかしそれは初めだけだ。彼らによって細かいながらも繰り返し繰り返し延々と彼らの望むように情報事象を改變され続けた人間は、逆に彼ら情報寄生体に依存するようになるのだ、ゆつくりと。依存が徐々に共生へと移行し、依存の比重は人間のほうが増していく。人間個人個人に情報寄生体に抵抗することは難しい。

人間は常に正解を創出できるわけではない。自らが創出した誤り

を正したい、変えたいと願う者が大半だ。情報寄生体は、宿主に定めた人間が創出した事象を情報改竄する、時に繊細に、時に大胆にわたし達に情報事象を引き起こすことは不可能だが既にそこに在る事象を改竄することは可能だ。それを徹底的に利用する。

情報寄生体に情報事象を操作され続けた人間は、そのうちに自分の意思を見失い、情報寄生体の改竄した事象を正解だと信じ始める。そしてついには、初めから情報寄生体の望む未来を、事象を創出し始める。自らが主体的に情報発生を行っていると思じて。

つまり、彼らは人間を未来事象創出のための道具として使役するのだ。それはとてもではないが、フェアな関係とはいい難いわ。わたしはそう思う。

それに、情報寄生体は自ら進化の芽を摘み取っているのだとも言える。自己進化の可能性を捨て、他の種的能力を利用して生きる。これほど惨めなことはいわね。

だから、わたしは彼らが好きではない。グレイと一緒に彼らをとつちめる、それが今のわたしの楽しみ、誰にも邪魔はさせたくない。グレイのような人間は、情報寄生体を狩るのに最適だと言える。

何故なら彼らは迷わないし、躊躇わない、恐怖も少ない。常に自分を肯定し続け、情報を撒き散らし、未来事象を主体的に創出し続ける。決して、自ら創出した情報事象を後悔しない。納得して受け止めることの出来る稀有な人間。彼らは未来事象を創出することに全力を注ぎ、後を顧みない。そこに情報寄生体の入り込む余地は無い。だからこそ対抗できるのだ。もちろんグレイの場合はわたしのサポートがあつてこそ、だけど。

グレイの口ずさむ歌は、いつの間にか陽気なメロディのサマーソングに変わっていた。

サンスポット市に季節はない、ただ名残りとしての期間の区切りがあるだけだ。ダイソン殻上の他の都市には、ある所もあるいはあるかも知れないが。

だから、グレイの口ずさむのは地球時代の曲だ。歌っている歌手

が誰でもどんな人物なのかは知らない、男なのか女なのかも。ただ、グレイがよく歌っている曲だ。わたしにとってはこの曲はグレイの曲なのだ。気分がノってハイになると、グレイはいつもこの曲を歌う。何だか、わたしも楽しくなってきた。一緒に歌い始める。初めは怪訝な顔をして聞いていたケイシイも、そのうち一緒に歌い始める。

車内は下手くそな合唱に包まれた。これから、何をしに行くのかなんてどうでもいいのだわ。今が楽しければ、それで充分。

難しいことを考えるのは、後にすればいい。考える時間など幾らでもあるのだから。

？
（前書き）

（HPから転載）

？

俺、がやって来たのは区外のダイソン天球内部点検用ハッチのある施設だった。

ミリ・ブライト、俺の初恋の相手、であるはずの女も一緒だった。ハッチのある施設には監視カメラが設置されており、施設を破つて侵入しようとする俺達を見逃すはずもなかった。最寄の武装警備員が急行してきた。

ミリには全く慌てた様子はない。俺には思考の意欲が乏しい。彼女と共に行動するようになってから、薄ぼんやりとした多幸感に包まれた状態が持続している。差し詰め彼女の存在は麻薬といったところだ、それも強力な。

ホバーバイクに乗ってやってきた警備員は銃を構えている。だが、今のところ俺達に抵抗の様子が無いので、最低限の警戒しかないようだ。

「よし、お前たち直ぐにそのドアから離れる。そうしたら手を頭の後ろで組んで、地面に膝をつけ、抵抗すれば撃つぞ。この中に入ってるのは神経障害電磁パルス弾だが、心臓の悪い奴は一発で御陀仏だぜ。見たところ健康そうだがやめときな。全身筋肉が引き攣れを起こして一週間はベッドから起き上がれなくなる」

銃は持っている。腰に挟んである銃を抜いて警備員を射殺することはそう難しくない。技術将校とは言え、一通りの訓練は受けている。中でも射撃は嫌いではなく、射撃訓練は頻繁に行っていた。

しかし、ここで警備員を一人射殺したところで直ぐに次が駆けつけてくるだけだ。面倒を避けたければ、他の方法を探さねばならない。

だが、俺はその続きを考えようと思わなかった。彼女が視線で解錠を促したからだ。俺は、警備員の事を一瞥しただけで作業に戻った。パネルを外して軍を辞める時に頂いてきた解析機を繋げる。こ

の程度の鍵ならば一分もあれば解けるはずだ。

解析を待つ間、警備員とミリを振りかえって見る。二人は奇妙なやり取りをしているように俺には見えた。

「ねえ、貴方はどんな未来を選ぶの？」

ミリの蠱惑的な声色に一瞬警備員の男が尻こみする。抽象的かつこの場に不釣り合いな質問に困惑する。

「黙れ。さっさとここから失せろ。俺の仕事を増やすな。安い給料でヤク中の世話までしてられるか」

胡乱気だった警備員はミリの的外的な返答から、俺達を一発キメておかしくなったカップルだとも判断したようだった。その言葉には先ほどには無かった殺気と軽蔑が混じっていた。

「貴方の未来を選びやすくしてあげる。全部、見えるわ、貴方には」
「はあ？ 何わけ分からねえ事言っただ。俺は、ここから失せろと……っあ？」

警備員の男は、素っ頓狂な声をあげて二、三步後ずさった。浮かぶのは得体の知れない状況に人間が遭遇した時に示す狼狽の表情だ。男がダブって見える。まるで残像を少しずつずらして、無限に重ね合わせたようだ。その光景は徐々に変化していき、今は男の周囲の空間は万華鏡の内部のようになっていく。

俺が立っている場所を見ても、そこには普通の地面があるだけだ。男の周囲に起る現象と通常の空間の境目は認識できない。突然、光景に変化が起っている。

そのうち男の姿は合わせ鏡のような状態に変わった。そう表現する他ない状態だった。

ミリが何事か高速で呟く。

男も何か返答するが、歪んだ不協和音にしか聞こえず、内容は聞き取れない。

次の瞬間、男の合わせ鏡が収束し、消えた。

俺には何が起ったのか理解出来なかった。ミリが何かをしたのだらうという事だけは分かった。

しかし、不可思議な現象について彼女に問うという考えは何故か浮かばなかった。あるのは、ただ彼女に尽くしたいという気持ちだけ。それだけだ。

彼女は、俺は考える、変わってしまったようだ。昔の彼女は少し臆病な所があり、無口でいつも何かに脅えている様子だった。友達と言える者も少なかった。だが、家族とは仲が良く、いつも笑いの絶えない家庭だった。家族と一緒にいる時だけは、彼女も笑顔を見せ、安息を感じていようだった。

そして、他人、それも異性には特に、心を開かなかった彼女が唯一家族のように接つことが出来たのが俺だった。幼い頃から知っていて、自分より年下の俺の事を、兄弟姉妹の無い彼女は、弟のように思っていたようだった。だからこそ、家族に見せるような笑顔を俺に向けてくれたのだろう。

今思うと、俺は昔から、それも本当に幼い頃から、彼女に惚れていたのだと思う。物心ついた時には、彼女が向ける笑みが自分にだけ向けられるものと気づいて、それに優越感を感じたりしていた。戻ってきた彼女は、よく笑う。しかし、昔のそれとは質が違う笑み、それが俺の感じる違和感の正体かも知れない。奥ゆかしさの中に慈しみを湛えた笑顔、昔の彼女の笑みを見ることはもうないかも知れない。現在の彼女が見せるのは、計算し尽くされた微笑み、蠱惑的な魔性の笑み、それだけだ。

だが、それでも良いのだ。あれから十年も経っている。十年と言えば人間が変わるのに充分な期間と言えるだろう。俺だってミリと再会するまでは、彼女の事など忘れて、別の女と結婚までして安穩と暮らしていたのだ。

ミリの死は俺に絶望を与えるのに充分過ぎるほどの出来事だった。俺が意識的に彼女の事を考えるのを避ける内に、記憶が忘却の彼方に過ぎ去って行ったのも無理はないのかも知れない。

そんな俺が、彼女の変化を不実として責める事など出来はしない。出来ることはただ従容として受け入れることだけだ。そう、自分に

言い聞かせる。

「開いたぜ。ついでに警備システムにもハッキングをかけた。中に入っても、警報システムも何も反応しない。ここの警報装置には別の情報を流しておいたから、さっきの警備員が消えた事もしばらくは気付かれないはずだ」

そう言って、解析機をパネルから取り外して懷に仕舞う。これがあればこの施設の警備システムを自由に操れる。

「ありがとう、ジム。あなたってやっぱり頼りになるわね。あなたを選んで良かったわ」

そういう彼女の笑みはやはりどこか底知れない冷たさを孕んだものだ。

「ああ、愛してるよ。ミリ……。行こう」

施錠を破ったドアを押し開けて、中に進む。後から彼女もついてくる。

入口を入ってすぐ階段があつた。ダイソン殻内部に続くであろう階段だ。その前には、活動を停止した警備ロボットが沈黙を守っている。すでにこの施設のシステムは完全に制圧済みなので、この警備ロボットも思い通りに操れる。例え、進入が気付かれたとしても、しばらくは足止めが可能だ。

階段を降りた先には、金属製の扉があつた。この扉も普通に開けた。問題は、この中にあるのだ。

「ここのシステムは制圧に時間が掛かる。完全に外部から独立していて、直接操作しなければ何も出来なかったから、さっきも手を出せなかった。内部の階層へ続くハッチは重要だ。堅固な防備が施されている。短時間では破れない、最低三時間は必要だ。軍の装備を使つてもだ。それまでに、侵入が察知されればおしまいだ。なあ、今ならまだ引き返せる。証拠を消して事が露見する前に遠くへ逃げられる。わざわざ内へ入らなくなったって、表面にだって俺達が静かに平和に過ごせる場所くらいある。怖気づいたわけじゃない、自分が死ぬのは構わない。ただ君を、もう一度失う事に耐えられないだけ

なんだ……」

この先に自由が、本当の自由が待つと彼女は言う。それでも俺は、自由よりぬるま湯のような平穏を選びたいのだ。

彼女は静かに笑って横に首を振った。答は否。聞く前から分かっていた返答でもある。それ以上は何も問う気はなかった。

「あなたは此処で作業を続けて、私たちの邪魔をする奴らが入って来れないように封印を施してくるわ。ねえ、だから安心して。私とあなたは下の世界で幸せになれるのよ。今更、引き返すなんてないわ」

彼女はそう言うて振り返りもせずに、降りてきた階段を再び登って行く。

それを見送り、ふと気になって手元のデヴァイスを覗きこむ。制御下に置いている施設の警備システムと繋いであるおかげで、監視カメラやセンサーからのデータを常時読み取ることができる。

何か予感めいたものを感じて、外部に設置されたカメラの映像を呼び出す。方向を操作して、周囲を探索するとまだ離れているがエアカーらしき影がこちらに向かって来ていた。

急いでカメラの倍率を調整し、映像を拡大する。確か、TVコマーシャルで見たことのあるタイプ、ドアはガルウイングでスポーツタイプの車輛だ。持ち主は、よっぽどの金持ちか、車好きか、あるいはナルシストだろう。

だが、こちらに来るのは良くない。まったく良くない。ただ通り過ぎるだけなら良いが、外に停めてある俺達が乗ってきた車に興味を示すかも知れない。ただの観光客なら会話で誤魔化せるだろうが、こんな所へ観光へくるのは学生か政府の役人だけだ。

デヴァイスを操作して、階段上のスピーカーと繋げる。マイクで拾った音声を送れば、彼女に警告することが可能はずだ。

「聞こえるか？ スピーカーを通して話してる。こっちに向かってる怪しい車輛がある。気をつけてくれ。問題が起こったら、こっちからも警備ロボットを操作して手伝う。五台あるから、しばらくは

持つはずだ。危ない事はしないでくれ』

ミリは監視カメラに向かって手を軽く上げた。了解のしるしだろう。口元が動き、何か言ったように見えたが、スピーカーはあってもマイクが無いため、音声を拾うことは出来ない。

再び、外部カメラに映像を戻すと、サングラスをかけた男と身長の高いスレンダーな美女が俺達のエアカーの周りを調べていた。その身のこなしから、俺は彼らがただの観光客とは違うことに気付いた。軍で培った勘だ。

俺は沈黙させておいた警備ロボットのコントロールを支配下に置き、すぐに外へ向かわせた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9248q/>

黎明の恒星殻

2011年4月25日08時40分発行